

柎の花最小をこゝろざす

藤田湘子

節分に戸口に挿す柎の小枝。棘のあるギザギザの葉の形が特徴的。初冬の頃、その葉陰に小さな白い花を無数に付ける。すこぶる匂がいい。楚楚として香気を放つ。花期は短く、意識して出会わなければ、すぐに消えてしまう花である。

掲句は柎の花そのものを書いた一物俳句であろうが、作者の俳句に対する志も感じる。世界最短詩の俳句も、柎の花のように最小を志して香氣ある存在であつて欲しい。その為にこの詩形に全身全霊を捧げよう。そんな氣概を感じ取れる句。

「男帯柎の花終りけり」 「柎の花の月夜の消えまじく」 「ひひらぎの花に到りしおもひぐせ」も愛誦句。

1686年 (s58.11.29作) 第六句集『一個』 鑑賞・野本京